
荒神（あらがみ）

ちま太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あらがみ
荒神

【Nコード】

N5501F

【作者名】

ちまた

【あらすじ】

和風ファンタジーBL小説。気まぐれで癩癩持ちの神に捧げられた生贄の青年は、体を玩ばれて毎日怪我が耐えない。腹の中では「バケモノ」と軽蔑しながらも、それでも村のため、病気の妹のため、荒神のご機嫌を損ねないよう、従順に仕えてきたが・・・神と呼ばれる妖怪X生贄の青年。人外ものノ一途な攻とひねくれた受がお好きな方はぜひ

#1 神への生贄（前書き）

ボーイズラブものになりますので、ご注意ください。

1 神への生贄

1 神への生贄

ごうごうと風が唸りを上げて吹き荒れる。

普段はのどかな山間の小さな村の風景が一変した。

山あいの盆地にささやかに広がる水田。

青い稲穂は今にも吹き飛ばされそうだ。

そんな水田のそばに、寄り添いあうように並んでいる小さな茅葺き屋根の家々も、強風に耐えきれずに歪み、軋みを上げている。

それでも必死になって地面にしがみついていた。

「荒神さまがお怒りじゃ！」

村落からはずれた山の中、ぽつんと建っている小さな社に駆け込んできた村人は叫んだ。

「荒神さまのお怒りを鎮めてください、神官さま！」

小さな社の奥の御簾が上がり、一人の青年が姿を現した。

「何をそう苛立っておいでなのです、あらがみ荒神さま」

神社の縁側に立った青年が天に向かって呼びかけると、それに対する返事のように、天から雷が降ってきた。

その雷は、いかずち青年の立つ縁側の屋根を直撃し粉碎していった。

破片が飛び散り、青年の白い頬から血が一筋滴り落ちる。

だが青年は痛みなど感じていないかのように顔色一つ変えず、仮面のような端正な面を相変わらず天に向けたままだ。

「武流、たけるお前は引っ込んでいろ！死にたいのか！！」

まるで雷鳴のように、男の怒鳴り声が空に轟いた。

「お鎮まりくださいませ、荒神さま。」

みな、怯えております・・・」

武流と呼ばれた青年は縁側から庭に下り、その華奢な体を天の下に

晒した。

「うるさい！」

遮るものない彼の頭上で、再び稲妻が走る。

今度雷が落ちたら、彼の命はあっけなく燃え散ってしまうだろう。

それでも、彼は怯む様子もない。

表情のない美しい顔を天に向け、呼びかけた。

「さあ、こちらにお戻りくださいませ。

荒神さまの大好きなお神酒もよく冷えておりますよ」

「・・・お前は、飲み食いさせれば、オレが機嫌を直すと思っているだろう？」

空から降ってきた黒い塊は、武流の前で人型の姿を現した。

武流も小柄な方ではなかったが、この男の背丈は頭抜けている。

武流の頭は、この男の胸ほどにしかならない。

背中まである黒い蓬髪は、癩癩持ちの主と同様聞かん気が強いらしく、

思い思いの方向に伸びている。

筋骨隆々の偉丈夫然としたその姿の中で、その髪は、まるで獅子のたてがみのように見えた。

「そのようなこと・・・」

大男の不貞腐れた表情を前にして、武流の仮面じみた面にかすかな笑みが浮かんだ。

「でも、こうして癩癩を起こしているよりは、お社の中で冷えたお神酒をいただいた方が、ずっと心地よいと思います。

私もぜひ、あのお神酒を荒神さまに召し上がっていただきたいですし」

「・・・お前がそこまで言うのなら」

いかにも渋々といった様子で、大男は頷いた。

「その酒を持って参れ。肴もな」

男は、その巨軀に似合わぬ身軽さで神社の縁側に上がると、スタスタと中に入ってしまった。

もったいつけてはいるけれど、もう舌なめずりなどしている。単純なものだ。

「はい」

大風が収まったのを確認して、武流は荒神の後につき従った。

『荒神』というのは、武流の村に住まう氏神だ。

神といっても、その素性は知れない。

この世界では、人と獣と妖あやかしとがそれぞれの論理で暮らしている。

妖は、人知を超えたその巨大な力で、災いをもたらす存在として人間から恐れられているが、人に害をなす者ばかりでもない。

中には、好奇心から人に近付いてくるものもある。

人にとって災いとなる存在を「妖」。

人のために益となる存在を「神」。

人が勝手にそう名付けているだけのことだ。

人間には理解不能の恐ろしい力を持つ存在　　ということ言えば、神も妖も同じだ。

武流の村の荒神は、確かに、大嵐から村人を守ってくれたり、どこからかやって来た恐ろしい人喰い鬼を追い払ったりしてくれるのだが、とても気まぐれな癪癪持ちなので、鎮め役が必要だった。

荒神は、気に入った者の言うことならば、それが人の頼みでも聞いてくれるのだ。

それが、山の中の小さな神社に住まう神官・武流の役目だった。

酒につられて癪癪をひっこめ、神社に戻ってきた荒神は、武流の用意した酒と肴に舌鼓を打ち、旺盛な食欲を見せていた。

武流は、そんな荒神の隣に座り、盃を空にしないよう酌をする。

荒神と生活を共にし、身の回りの世話をするのは、神官の役目である。

人を超えた力を持つ存在と、直接言葉を交わすことのできる唯一の人間

それゆえに武流は、村人たちから「神官さま」と、神同様に崇め奉られているのだ。

盃を呷った荒神は、肴に箸を伸ばそうとはせず、その代わりに、隣に座る武流の腰に腕をまわしてきた。

武流の華奢な体は、たやすく荒神の逞しい腕の中に収められてしまった。

「・・・荒神さま、まだお食事の途中」

武流が言いかけるのを、荒神は遮った。

「酒はもうよい。

遊ぼうぞ」

荒神はそう言って、武流の体を畳の上に押し倒した。

『神に選ばれた尊い存在』

人は武流をそう呼ぶ。

でも、そんなのは建前の話。

己れの境遇を思うと、武流の胸には皮肉めいた笑みが込み上げる。

「武流」

荒神に押し倒され、帯を外されても、もちろん、抗うことなどない。

何が「人の言葉を神に取り次ぐ神官」か。

やってることは、娼婦とおなじだ。

武流は、生贄。

制御不能のバケモノに、ご機嫌をとるためにしゃぶらせる甘い飴玉。

「武流の肌はすべてで気持ちよいの」

荒神は、子供のように無邪気に笑いながら、武流の裸の胸に指を這わせた。

武流は、荒神の求めに応じて、体を開く。

仰向けに寝転がると、縁側の先の真っ青な空が見える。

空が高い。

天高く馬肥ゆる秋。

そうか、もうそんな季節になったんだなあ・・・

武流はのんびりとそう思った。

その間も荒神は、己れの欲望を遂げることに夢中になっている。

痛い。

武流は顔をしかめた。

自分の中に他人がいるという感覚は、何度経験しても慣れない。

男の体は、他人を受け入れるようにはできていないのだ。

気持ちいいわけではない。

それでも、荒神の求めとあれば仕方ない。

受け入れるのが、神官たる武流の役目。

また癩癩でも起こされたら、田んぼの稲穂が全滅してしまう。

もう収穫は目の前だというのに。

それに、これからは台風の季節。

荒神の力で、村の畑を守ってもらわなければ・・・

荒神さまのご機嫌をとって、言うことを聞いてもらうために、武流

はいるのだ。

分かってる。

だけど、いくら意識を飛ばして感じないようにしても、痛いものは

痛いし、苦しいものは苦しい。

武流の体を夢中になってむさぼっている荒神の、武流の腕をつかむ

指に力がこもる。

ぎしぎしと骨が軋む。

体中、どこもかしこも痛みで悲鳴を上げている。

ああ、早くイけよ、この野郎・・・！

武流が神官となり、荒神に仕えるようになって早三年。

その間に負った怪我は数知れず。

手足は五、六回は骨折しているし、肋骨も二、三本は折れた。

肩の脱臼なんて二度や三度じゃないし、股関節を脱臼したこともある。

さすがに、首の骨がきしんだ時には、もうダメだと思ったが、なんとかムチ打ち程度で済んだ。

よくもまあ、今まで死なずに済んだものだ。

人間の体とは、思いのほか頑丈にできているものらしい。

武流が怪我をするたびに医者と呼ばれ、治療を受ける羽目になるのだが、

このときの恥ずかしさときたら、死にたくなるくらいだ。

医者の方も事務的に済ませようとしているのだが、時折、目が合っ
てしまう。

自分を見る医者の方に浮かぶ色。

それは、哀れみ。

その瞳に気付くたび、武流は自分がいかに惨めな存在なのかを思い
知らされるのだ。

でも、これは仕方のないこと。

生きていくために、自分自身が選んだ道なのだから。

おれは、人形。

心なんかない。

ただ、荒神の意に従うだけの人形なのだ。

強大な力を持つ奴にとっては、人間なんてただのオモチャ。

壊れたら、新しいのに乗り換えるだけ。

だから、容赦なく遊ぶ。

荒神は、子供と同じだ。

無邪気さゆえに、残酷なことも平気でできる。

武流にも覚えがある。

子供の頃、捕まえた蝶の羽をちぎって殺してしまったこと。

蝶が憎くてやったわけじゃない。

むしろ、愛おしいとさえ思っていた。

だけど、可愛い可愛いといじりまわしているうちに、力の加減を知
らない子供は

羽をむしり、殺してしまう・・・

荒神も同じだ。

武流を殺すつもりはないのだ。

ただ、その体を面白がっていじくっているうちについ夢中になり、その力の強大さゆえに、武流の体を痛めつけてしまうのだ。

それが証拠に、武流が尋常でない苦しきようでのたうちまわる姿を前にすると、

荒神はただオロオロとするばかり。

親に叱られるのを怯える子供のように、ふいと姿を消してしまうのだ。

そうして、ほとぼりが冷めた頃、ふらりと戻ってくる。いつそのこと、殺してくれば楽になれるのに。

子供が飽きずにお気に入りのオモチャで遊び続けるように、荒神もまた、暇さえあれば武流を求め、好奇心の赴くままにその体をいじりまわす。

強大な神通力を持つバケモノに体を玩ばれて、武流は怪我が耐えなかった。

大抵のことなら我慢するが、さすがに関節を外されたり骨を折られたりしては、その痛みは耐え切れるものではない。

武流が激痛にのたうちまわる姿を前にすると、荒神も「まずいことをした」という意識があるのだろう、姿を消してしまうのだが、しばらくして武流が動けるようになる、何事もなかったかのように、神社に戻ってくるのだった。

手にはおいしい果実など、武流の好物を持って。

「武流！お前の好物の葡萄だぞ。喰え」

そう言つて、今回もまた荒神は、食べきれないほどたくさんの葡萄を両手に抱えて、まだ包帯の取れない武流の元に帰ってきた。

「どうだ？うまいだろう」

「はい、おいしゅうございます。ありがとうございます、荒神さま」
武流が頭を下げ、丁寧に礼を言う姿を見て、荒神は満足そうに頷いている。

「梨や甘柿もたくさんあるぞ。」

好きなだけ喰え」

でかい態度は相変わらずだ。

『悪かった』『すまなかつた』と一言でも詫びの言葉を口にするなら、まだ可愛げもあるのに。

体をメチャクチャにされて、こんな果物くらいでご機嫌をとれるとも思っているのだろうか。

だが武流は、そんな腹の中などおくびにも出さず、荒神に言われた通り従順に、葡萄をほおばった。

荒神は武流の隣に座ると、一緒に梨にかじりつきながら、ちらちらと横目で武流の様子を伺っている。

相手をするのも鬱陶しいので、葡萄に夢中になっているふりをしていた武流だったが、さすがにこうまで露骨なことをされては、気付いてやらないわけにもいかない。

「・・・何か？」

武流が水を向けると、荒神は、筋骨隆々の逞しい体を縮こまらせて、子供みたいに上目遣いで武流を見つめてきた。

「・・・怒っているのか？」

「怒ってなどおりませんよ」

武流はにっこりと笑って答えた。

いちいち腹を立てていても仕方ない。

相手は人間じゃない、道理の通じぬバケモノ。

どんなに理不尽なことであろうとも、ひたすら耐え忍んで、荒神の機嫌をとるのが武流の役目。

覚悟はできている。

惨めで苦しい仕事だけれど、これも全ては妹のため

「本当に？」

荒神は、捨てられた子犬みたいにじっと武流を見つめてくる。

「本当ですとも」

武流は、笑顔で答えた。

心にもないことを言うのには、もう慣れた。

だが、武流の言葉に荒神は、分かりやすいほどぱっと顔を輝かせた。
「よかった」

単純。

言葉の文字通りの意味しか捉えられないこいつは、やっぱり人とは違うバケモノなのだ。

「夕飯には、鱒を食おう。取ってきてやるから、待っている」

荒神は上機嫌で立ち上がった。

「では、私は、煮炊きの準備をしております」

立ち上がった武流だが、ふいに背後から抱きしめられた。

先日、あばらを折られた時の悪夢がよぎって、反射的に全身が緊張する。

しかし、武流を抱いた荒神の腕にはほとんど力はこもっていないかった。

人なつこい犬みたいに、荒神は武流の首筋にぐりぐりと頬ずりする
と、

「武流は柔らかくて、いい匂いがする」

うつとりと目を細めた。

暑苦しい。

と思ったけれど、武流はされるがままに体を預けた。

荒神は、鳥の羽でも捕まえるように細心の注意を払って、武流の体を抱いている。

少しは、この前のことを反省しているらしい。

いつまでもつことやら。

怪我を負わせた直後は力を加減するものの、そのうち慣れてくると、そんなことは忘れてしまうのだ。

いつもその繰り返し。

あと二、三ヶ月もすればまた、医者と呼ばれる羽目になるのだろう。

武流はもう諦めていた。

上機嫌で出かける荒神を、

「いってらっしゃいませ」

と、仮面のような笑顔で見送った。

#2 折鶴のいのり

#2 折鶴のいのり

夕食を食べ終えた荒神は縁側に座り、眼下の景色を眺めていた。

その逞しい両腕の中には、武流がいる。

まだ包帯のとれない武流に気を使っているのか、ただ抱きしめ、時おり頬ずりしてくるくらいで、無体なことは求めてこない。

武流は人形のようにおとなしく抱かれていた。

こういう時の荒神は、図体はでかいけれども人懐こい犬のようなもので、人畜無害だ。

だが荒神の癩癩は、嵐やにわか雨のようなもの。

今の機嫌がいつまで続くのかは、武流には全く分からない。

荒神が訳の分からないバケモノである以上仕方ないことと諦めているとはいえ、この荒神と付き合うのは、人の身にとっては命がけだ。

「きれいだな」

荒神の視線の先で、山の裾野にちらちらと灯が点っている。

武流の村の明かりだ。

あの灯の下で人々は、つましく暮らしている。

「あそこで人間は何をしてるんだ？」

荒神の言葉に、武流は答えた。

「あれは、それぞれの家族の家。」

人は寄り添いあって、生きているのです。

人は、荒神さまと違って、無力な生き物ですから

「カゾク？」

人間は、あんな狭い所に集まって暮らしてるのか？」

「はい。人は一人では生きられない弱い生き物。

人はみな、家族と共に暮らしています」

荒神はその目線を、山辺の灯から武流の顔へと移した。

「武流はどうしてカゾクと暮らさないのだ？」

「私は、荒神さまにお仕えするのが役目ですから」と、武流は答えた。

「それに、一緒に暮らせる家族もいませんし」

「じゃあオレが武流のカゾクになってやる」

「・・・は？」

唐突な荒神の言葉に、武流は目をしばたいた。

「オレは武流と一緒に暮らしてる。」

オレたち、カゾクだな！」

バケモノと家族だなんて冗談じゃない。

その言葉を飲み込んで、武流はにっこりと微笑む笑顔の仮面をつけた。

荒神の方は、その笑みを勝手に肯定の意味と受け取ったらしく、子供のように満面の笑みを浮かべた。

人懐こい犬のように、鼻先を武流の首筋にこすりつけてくる。

うっとおしいな。

と思いつつ、武流は視線を荒神の頭の向こうに向けた。

縁側の軒先から下がっている千羽鶴。

風を受けてゆらゆらと揺れている。

おゆう。

早くよくなっておくれ。

また、お兄ちゃんと一緒に暮らそう。

その日が来るまでの辛抱だと思えば、おれも耐えられる。

その日は朝から、武流はそわそわしていた。

荒神はまだ、社の奥で軒をかいているが、武流は朝日が昇るのと同じ時に寢床から起き出す。

そう、今日は十日に一度の、下の村から差し入れが届く日。

じつとしてられない思いで、武流は社から出、神社の入り口に立つ鳥居のところ待つ。

目をこらすと、森の木々の間から、米俵や野菜の束を背負って山道を登ってくる村人たちの姿が見えた。

「おはようございます」

武流は手を振って、やってきた村人たちに挨拶した。

「おお、武流」

荷物を背負った男たちの先頭に立つ初老の男が、にっこりと微笑んだ。

「この秋の大風も、荒神さまのおかげでやり過ごすことができた。

これで今年の豊作も間違いない。

これも、武流、お前のおかげだ」

「それは良かったです」

武流は、村の長の言葉に笑顔を見せた。

荒神との暮らしの中では決して出てこない、自然な笑みがこぼれる。二人の背後では、荒神と武流のための食料を持ってきた村人たちが、背負った荷を次々と蔵に運んでいく。

十日に一度、村人たちは、生活に必要なものを神社に届けにやって来るのだ。

そして、何より武流が心待ちにしているものも。

「長」

武流が待ちきれないという表情で促すと、長の方も気付いて、

「おゆうからの手紙だよ」

いつものように、手紙とそれに添えられた千代紙の折鶴を渡してくれた。

武流の表情がぱっと明るくなる。

その様子に、長は目を細めたが、

「・・・まだ、包帯は取れぬのか」

武流の着物の襟元からのぞける白い包帯に気付き、長は眉根を寄せた。

「すまん、武流。つらい役目をさせて・・・

だが、荒神さまはお前のことを大層お気に召している様子。お前の言うことならば、大概のことは聞き届けて下さる。

この村は、お前だけが頼りなのだ」

「妹のために、京から高名な薬師を呼んで、高い治療費を払ってくださっていることには感謝しています」

武流は黒曜石のように輝く美しい瞳を向けて、長に言った。

「でも、おゆうの病がよくなったら、おれはおゆうと一緒に暮らします。」

その約束は忘れないでください」

妹からの手紙と折鶴を、武流は会えない妹の代わりにぎゅっと胸に抱きしめた。

十日ごとに届けられる妹からの手紙。

バケモノに奉仕する惨めな毎日の中で、それが唯一の心の支えだった。

お兄ちゃん、お元気ですか？

わたしは、薬師の先生から外に出ては駄目と言われてるけど、熱があるとかどこかが痛いとか、そんなことはないの

だから、心配しないでね

昨日の夜、障子を明けて空を見ていたら、お月さまがきれいでした
お兄ちゃんも、今夜、月を見てみてね

とつてもきれいだから

私も今夜、部屋から月を見ます

お兄ちゃんも一緒に月を見てるんだと思うと、寂しくないもの
薬師の先生が出すお薬はとっても苦くて、おいしくないけど、

でも、頑張って全部飲みます

早くよくなりたいもん

わたしが元気になったら、また、お兄ちゃんと一緒に暮らせるんだ
もんね

一日も早くその日が来るように、がんばるね

家族と一緒に暮らしたい。

一人、蔵の奥で妹からの手紙を読みながら、武流は涙をこぼした。両親は、流行り病でとつくの昔に死んでいた。

妹のおゆうだけが、武流の家族。

唯一の心の支えだった。

妹の病を治す　そのためならば、何でもする。

心を殺し、バケモノに奉仕することだって。

それで、再びこの手におゆうを取り戻すことができるなら。

つづく

#3 折鶴のいのり(2)

#2 折鶴のいのり

「武流！武流！」

蔵の外から、荒神の声が聞こえてきた。

目が覚めたら隣で寝ていたはずの武流がいなくなっていたので、驚いたのだろつ。

武流は慌てて、涙を拭った。

こんなところを見られるわけにはいかない。

荒神には、おゆうのことは隠しているのだ。

だってもし知ったら、あの荒神のことだ、子供のような好奇心からおゆうの顔を見に行きたがるに決まってる。

おゆうに荒神を会わせるわけにはいかない。

あんなバケモノを。

心の蔵が悪いおゆうの前で癩癩でも起こされたら、それこそ、おゆうの命に関わる。

もし、おゆうがいなくなったら

想像しただけでも、足が震えて立てなくなるほどの恐怖を感じてしまふ。

荒神には、おゆうのことは絶対に秘密だ。

武流は、妹からの手紙を蔵の小さな箱の中に隠そうと立ち上がった。

「こんな所にいたのか、武流」

蔵の扉が開いて、荒神が顔を覗かせた。

「何をしているんだ？」

「な、何でもありません、荒神さま」

武流は手にしていた手紙を咄嗟に、背中に隠した。

だが、その行動はかえって荒神の気を引いた。

「なんだ、それ」

荒神がすうつと手を伸ばすと、武流が背中に隠そうとした手紙がふ

わりと宙に浮きあがり、その指先に届いた。

「手紙？」

荒神はじつと紙面に目を落とす。

「お兄ちゃん？」

「返して！」

咄嗟に武流は荒神の腕にすがり、ひったくるように手紙を奪い取った。

荒神は目を丸くして驚いている。

それはそうだろう、武流が荒神に対してこんな態度をとったのは初めてだったから。

どんなに理不尽なことがあっても、ひたすら従順に仕える。

荒神のご機嫌を損ねないように。

それが、生贄たる武流の役目。

今までずっとその掟に従ってきたのに。

しまった。

武流は口唇を噛んだ。

だが、今さら取り返しが見つからない。

仕方なく、武流は本当のことを口にした。

「・・・これは妹からの手紙。」

おれにとつて、命と同じくらい大事なものだから」

武流は手紙をぎゅっと抱きしめて、荒神に頭を下げた。

「失礼なことをして、申し訳ありません」

癪癪を起こした荒神に、殺されても仕方ない。

武流はそう覚悟した。

荒神がその気になれば、武流の四肢など簡単にバラバラにできる。

「武流には妹がいたのか！」

だが、荒神は嬉々とした表情を浮かべて武流を見つめてきた。

「武流にもカゾクがいたんだな」

荒神の反応に、武流は拍子抜けした。

やけに嬉しそうな顔をしたりして、訳が分からない。

やっぱり、こいつは理解不能のバケモノだ。

「カゾクがいるのに、どうして一緒に暮らさないのだ？」

「それは・・・おゆうは重い病で・・・」

村から離れられないのです」

「そうだったのか。」

それじゃあ、今どうしているか、顔くらい見たいだろう」

「え？」

きよとんとした武流に構わず、荒神は、土蔵の壁に手をついた。

するとそこから陽炎が立ち、白い壁が水面のようにゆらゆらと揺れ始める。

何事かと目を凝らす武流の前で、暗い土蔵の中に、のどかな田園風景が広がった。

澄んだ空に向かって伸びる青い稲穂。

その向こうに並ぶ、小さな家々。

その景色には、確かに見覚えがあった。

武流の村だ。

農作業を終え家に戻っていく村人たちの姿が見える。

父や母の姿を見つけた子供たちがはしゃいで騒ぐ声も、聞こえてきた。

懐かしい景色。

そして、土蔵の中に映し出された一軒の家。

武流は、きゆうと胸がしめつけられる思いがした。

そこそは、病の妹が暮らしている家。

おゆう。

武流は食い入るように、見つめた。

まるで村に戻ったように、懐かしい家が近付いてくる。

すうつと壁を通り抜け、家の中が映し出された。

何も無い質素な家だけれど、きれいに片つけられている。

だが、そこには誰もいなかった。

ここで、おゆうは寝ているはずなのに。

家の中を通り過ぎ、武流の前の風景は、庭へと移っていた。

銀杏の木が、青い葉を揺らしている。

ひらり、と葉が落ちた。

落ちた先の地面が、こんもりと盛り上がっていることに、武流は気付いた。

小さな野の花が生けられている。

そして、そこには、折り鶴が供えられていた。

これでは、この土まんじゅうは、まるで

「ん？ これは墓？

武流、お前の妹は死んでるんじゃないか」

荒神は、難しい問題の正解を見つけ出した子供のような、得意げな顔で言った。

「やめる！」

武流は怒鳴った。

こんな風に我を忘れて怒鳴ったことなど、生まれて初めてだった。

荒神もその語気の強さに驚いたらしい。壁から手が離れた。

とたん、村の景色は消え、二人は薄暗い土蔵の中に取り残された。

「武流？」

荒神は、武流の顔を怪訝そうに見つめていた。

なぜ武流が怒鳴ったのか、まるで分からないという顔をしている。

自分ではとびきりの冗談だと思っていたのに、誰も笑ってくれなくて、困惑している子供のような表情。

おれは一体なにをしてるんだ。

そんな荒神の顔を前にして、武流は心が冷えていくのを感じた。

おれは、何をしてるんだ。

おゆうが死んだなんて・・・そんな不吉な冗談に付き合わされて。

そうまでして、なんでおれは、このバケモノと一緒にいなければならぬ？

体を玩ばれて。

心まで踏みにじられて。

どうして、こんなバケモノに仕えなければならぬのだ？

武流は、荒神に背を向け、歩き出した。

そんな武流に、荒神は慌てて言いすがってきた。

「どこに行くのだ？武流」

「おゆうの所に帰る」

武流は、荒神を振り返った。

「おれは、おれの家族と暮らす。

バケモノなんかと一緒にいるのは、もう御免だ」

気に入らないなら、殺せばいい。

もう、うんざりだ。

これ以上、惨めな思いを味あわされるのは。

武流はそう心を決め、土蔵の外に出た。

4 偽りのいのち

3 偽りのいのち

村に戻るのは三年ぶりだ。

荒神への生贄として山の中の神社で暮らすようになってからというもの、一度も村に下りたことはない。

おゆうとも、手紙のやり取りは頻繁にしていたが、実際に顔をあわせるのは、三年ぶり。

ずいぶん大きくなっていくだろうか？

心の臓の病は少しはよくなっているのだろうか？

待っている、おゆう。

もう寂しい思いはさせない。

これからは、一緒に暮らそう。

たくさん働いて、どんなことをしてでも、お前の病気は治してみせるから。

武流は、山の麓の村に戻ってきた。

村の風景は、三年前と全く変わっていない。

武流がこの村を出て行った時とまるで同じ顔で、ふるさとの村は武流を迎えてくれた。

実りの重みに頭を垂れている稲穂を脇に見ながら、田んぼをつつきつて、武流は懐かしい我が家へと向かう。

「おにいちゃん、だれ？」

途中で子供に声をかけられた。

畑で働いている両親を待つ間、野原で遊んでいた子供たちがわらわらと近付いてくる。

見知らぬ顔が村にいるのに気付いて、興味津々といった表情だ。

この子らは、武流が村にいた頃は、まだ赤ん坊だったのだろう。

「どこからきたの？」

「あの山から下りてきたんだよ」

武流が答えると、子供たちの顔がぱつと輝いた。

「じゃ、荒神さまに会ったことある？」

「あるよ」

武流の返事に、子供たちはどつと沸いた。

「わーすーいー！」

「荒神さまの顔みたんだー」

子供たちは無邪気に喜んでいる。

「こら、お前たち、何を騒いでいるんだ」

男の声がした。

振り返ると、鍬をかついだ男が近付いてくる。

その顔には見覚えがあった。

武流は、軽く会釈する。

すると男は武流の顔を見て、驚きに目を丸くした。

「武流！どうしてこんな所に？」

「妹の様子を見るに」

武流が答えると、男は慌てた様子で、

「荒神さまのお世話はどうした？」

妹のことなら心配はいらぬと、村長から聞いているだろう？

荒神さまのお世話はお前にしか務まらん仕事。

何しろ、荒神さまはお前のことを大層気に入っているんだから・・・

お気に入りのお前がいなくなったと知ったら、癪癪を起すかもし

れん。

暴れられでもしたら・・・」

「大丈夫。

おれ、もう荒神さまには嫌われたから」

「なに？」

「もうお前のようなバケモノとは一緒に暮らせないって言ってきた」

「なんとということを！..！」

男は顔を真っ赤にし、その後、先々のことを思って真っ青になった。そんな男の反応を、武流は冷ややかに見ていたが、

「それじゃあ、おれ、おゆうのところへ帰るから」

武流が背を向けると、男はその肩をつかんで引き止めてきた。

「ま、待て、武流。落ち着け。」

今からなら、まだ間に合うだろう。

戻って、荒神さまに謝ってこい。

一人で行くのが嫌なら、おれたちも一緒に行って謝ってやるから。な？」

それから、男は周りの畑で野良仕事をしている村人たちに向かって、助けを求めるように声を上げた。

「みんな！武流が！武流が戻ってきたぞ！」

その声に、村人たちが何事かと集まってきた。

武流を見たその顔には、一様に動揺の色が浮かんでいる。

「おれは、おゆうと暮らすから」

集まってきた村人たちにそう宣言すると、武流は妹の待つ家に向かって歩き出した。

「ま、待て、武流」

「おゆうのことなら、おれたちが面倒みてるから」

「お前は、荒神さまのそばにいてやってくれ」

「神官の仕事が辛いのは分かるが」

「荒神さまのお気に入りにはしかできぬ事なのだ」

「この村のためだと思って」

「山に戻ってくれ」

「その方がお前のためにもなるんだ」

村人たちの声が、武流にすぎりつく。

しかし、武流はそんな声を振り切って、家に向かって走った。

おゆう。

お兄ちゃんが帰ってきたぞ。

これからは、何があっても離れない。

おれがお前を守ってやるからな・・・！

「武流、家に入っではいけない！」

「ダメだ！」

村人たちの間から、悲鳴にも似た声が飛んだ。

武流は、家の扉を開いた。

家の中は静かだった。

質素だったが、きれいに片付けられていた。

そこには、妹が寝ているはずの布団もなかった。そう。

荒神が見せた、土蔵の中あの幻そのままに。

武流は、縁側の障子を開いた。

庭では、銀杏の木が青い葉を風に揺らしている。

ひらり、と葉が落ちた。

落ちた先の地面が、こんもりと盛り上がっていることに、武流は気付いた。

小さな野の花が生けられている。

そして、そこには、折り鶴が供えられていた。

これでは、この土まんじゅうは、まるで

「おゆうー！」

武流は妹の名を叫ぶなり、裸足のまま庭に飛び出した。

「おゆうはどこだ！」

「・・・武流、おゆうは死んだよ」

いつの間にか立っていた村長が告げた。

その後ろには、村人たちが悄然としてたたずんでいる。

「・・・うそだ」

武流は血走った目で睨んだ。

「そんなの嘘だ。」

だって、おゆうから手紙が……」

村長は、黙って首を振った。

そうして、武流は全てを悟った。

「おれを騙していたのか……!!」

庭の土まんじゅうは、昨日今日作られたような新しいものではない。もう、何日も……何ヶ月も前に、おゆうは死んでいたのだ。

「どうして……」

どうして、おゆうが死んだのを教えてくれなかった!？」

血を吐くような武流の叫びに、答える者は誰もいなかった。

答えを聞かずとも、武流には分かった。

おゆうが死んだことを隠していたのは、武流に今のまま荒神に仕えてもらいたかったからだ。

病気の妹が死んだとなったら、武流が辛い務めに耐える意味などない。

神官の仕事など放り投げて、逃げてしまっただろう。

誰がそれを止められる？

だから、村人たちは黙って、おゆうが死んだことを隠していたのだ。武流に、荒神の鎮め役であり続けてもらうために。

おゆうがとつくに死んでいたなんて。

それでは、おれが今まで耐えていたのは、何のためだったんだ。

おれを騙していた連中のためなんかには、おれはバケモノに玩ばれる屈辱に耐えていたというのか……!!

武流の体は無意識に動いていた。

白い手が、庭先に放置されていた小刀をつかむ。

おゆうがもういないというのなら、これ以上、耐えることなどない。

おれは、ひとりぼっちになってしまった・・・
おゆう。

おれを置いていかないでくれ・・・
鈍く光る刃の切っ先が喉を貫く寸前、武流の体に無数の腕が伸びてきて、小刀は奪われた。

「武流。

荒神さまは、いたくお前のことをお気に召されている。

お前に死なれては困るのだ」

無情な声が武流の頭上から降って来た。

「舌を噛めぬよう、猿ぐつわを」

もはや抵抗する気力もなく、武流はされるがままに体を投げ出した。
つづく

5 神様だって叶えられない願いを抱えてる

4 神様だって叶えられない願いを抱えてる

武流は、荒神の住まう山の中の社へと送り返された。その様子はすっかり変わってしまった。

人形のように空ろな瞳で社の奥の間に座っているだけ。

武流の心は、死んでしまったのだ。

「武流」

荒神が名前を呼んでも、何の反応も見せない。

そんな武流に、荒神は苛立たしげな表情を浮かべた。

癩癩を起こす前触れだ。

今までなら、それを察した武流がお神酒やおいしい食べ物を用意して御機嫌伺いをするところだが、もはや彼がそんなことをするはずもない。

そんな武流に、荒神は黙って近付いた。

そうして武流を抱きかかえるなり、社を飛び出した。

すごい速さで闇の中を進んでいく。

周りの景色は矢のように流れていき、武流にはどこを走っているのか、全く分からなかった。

速さが増していくほどに、前から吹いてくる風の強さも増してくる。苦しい。息ができない。

武流は声を出すこともできずに、荒神の腕の中でもがいた。

荒神の方は、そんな武流の様子には気付いてもいないようだ。

ああ、駄目だ。死ぬ……！

半分気を失いかけたところで、

「武流」

荒神に名前を呼ばれた。

「目を開けている。
今、妹に会わせてやる」

妹・・・？

何を言っているのだろうか？こいつは。

朦朧とした意識の中、武流は顔を上げた。

いつの間にか、強い向かい風は止んでいた。

荒神が足を止めたのだ。

目の前には、そのてっぺんが雲に隠れて見えないほど巨大な扉がそびえていた。

「しっかりつかまっている」

荒神は遅しい片手で武流の痩せた体を抱えると、空いたもう一本の腕をその扉にかけた。

「なんだ、貴様は！？」

とたんに、声が飛んだ。

この恐ろしく巨大な門の番人なのだろうか、二つの頭を持つ犬に似たバケモノが駆け寄ってきた。

「どけ」

荒神は顔色一つ変えず、腕を一閃した。

長く鋭い爪が、犬に似たバケモノの体を引き裂いた。

暗闇の中に、真っ赤な花が咲く。

荒神は、目の前の扉を押し開けた。

「曲者じゃ！」

「皆の者、出あえ！曲者を通すな！」

あちこちから声がわき起こり、見るだに恐ろしげな異形のものたちが殺到してきた。

だが荒神はものともせず、行くを阻む者は手片っ端から斬って捨てながら、ひた走る。

異形のものたちの血が、武流の頬に飛んできた。

ここは一体どこなんだ・・・！？

だが、荒神に問い質せるような雰囲気ではなかった。

荒神の黒い瞳は、真正面の一点だけをひたと見つめている。そこには、細長い塔のようなものが立っていた。

荒神は武流を抱えたまま、一陣の風となり、たちまち塔のふもとにたどり着いた。

そこには、異形のバケモノではなく、ごく普通の人間の姿があった。まるで塔の中に入る順番を待つように、老若男女、大勢の人間があふれている。

武流の目はしかし、ただひとつの顔に注がれていた。

「おゆう！」

「・・・おにいちゃん」

少女が黒い瞳を真ん丸くして、武流の顔を見つめ返している。その愛嬌のある大きな瞳は、確かに懐かしい妹のもの。だが、おゆうは死んでしまったのだ。

妹にそっくりな姿をしたあの少女は、一体なんなんだ？

「それが、お前の妹か」

荒神は武流をその場に下ろすと、言った。

「武流、妹を連れて、さっきの門の所に戻れ」

「馬鹿な・・・おゆうは死んだと・・・」

混乱している武流に、荒神は静かに諭すように告げた。

「ここは、死んだ人間の行く黄泉の国。」

お前は妹と暮らしたいのだろう？

ならば、妹をここから連れ戻せばいい」

黄泉の国？

思いもかけない言葉に、武流は頭の整理が追いつかず、ただ荒神の顔を見つめていた。

一体なにを言い出すんだ？こいつは。

「死者の魂を現世に連れ戻そうなど、言語道断。」

そのようなこと、許されるはずがない！」

地の底から、低い声が響いた。

辺りの空気がざわめくのが肌で感じられる。

「この世界の掟を破ろうとする不屈き者、その方は何者じゃ!！」

「掟などクソ喰らえ！」

そんなもの、オレが変えてやる」

天に向かつて、荒神は吼えた。

そうして、武流の腕をつかんで走り出そうとしたので、武流は咄嗟に妹の手を取った。

幻じゃない。

その小さな手は、確かにここに存在している。

荒神は兄妹を両手に抱きかかえると、風のように駆け出した。

「お前たちはここに隠れている」

しばらく走ったところで、身を潜めるのにちょうどいい物陰を見つけた。

荒神は武流とおゆうをそこに隠すと、追って来る異形たちの前に身を躍らせた。

「おゆう・・・」

武流は、久しぶりに再会した妹の顔を見つめた。

顔色は紙のように真っ白だったが、小鹿のようにくりつとした黒目がちの瞳は変わらない。

懐かしさに、胸が苦しくなる。

武流は、妹を掴む手にぎゅっと力を込めた。

そうして、気付いた。

まるで氷をつかんだような、その冷たさに。

体温が感じられない。

妹の体は確かにここにあるけれど

しかし、その肉体はもはや生きてはいない。

おゆうは、確かに死んでしまったのだ。

それを思い知らされて、武流の目から涙がこぼれた。

「ごめんな、おゆう・・・おれはお前を守ってやれなかった・・・」

「泣かないで、おにいちゃん」

おゆうはにつこりと微笑んだ。

「お兄ちゃんは、一生懸命やってくれた。

あたしは幸せだったよ」

おゆうは細い腕を伸ばして、武流の体を優しく抱きしめた。

その体に体温は感じられなかったけれど、でも武流の心にその温もりは確かに伝わった。

今なら、まだ間に合う。

さっきの扉、あれが現世と黄泉の国とを分かつ門なのだろう。

あそこを開いて、現世に戻れば

「帰ろう、おゆう。」

荒神がいてくれれば、大丈夫だよ」

だが、おゆうは微笑んだまま、首を横に振った。

「ううん、あたしは行けないわ。」

荒神さまにだって、死んだ人間を生き返らせることはできないのよ」
見て。

おゆうの指し示した先では、全身血まみれの荒神が立っていた。

二人を連れて逃げるために、黄泉の国の門番たちと戦っているのだ。

さすがの荒神も、斬っても斬っても沸いてくる異形相手に満身創痍。

血まみれの阿修羅のごとき凄まじい姿に成り果てていた。

「荒神さま、もうやめて。」

このままでは、荒神さまが死んじゃうわ」

おゆうが叫んだ。

荒神はくるりと振り返ると、吼えた。

「ダメだ！お前は死んではダメだ！」

その様子は、人を超えた力を持つ神というよりも、ただの駄々っ子だ。

そんな荒神に、おゆうは、大人びた笑顔を向けた。

「ありがとう、荒神さま。お兄ちゃんと会わせてくれて・・・」

でも、あたしは行きます。

心残りなんてない。あたしはお兄ちゃんに愛されて、とつても幸せだったもの」

それから、武流を振り返った。

「お兄ちゃんと荒神さまが仲良さそうで安心したわ。

さよなら、お兄ちゃん。

あたしのことなら、悲しまないで。

お父さんとお母さんに会えるんだもの、寂しくないわ。

お兄ちゃん、これからは、自分のために生きてね・・・」

おゆうがぎゅっと武流の手を握った。

その手は氷のように冷たくて、硬かった。

もう、おゆうの肉体は滅んでしまったのだ。

自分を見つめる妹の穏やかな眼差しに、武流は悟った。

おゆうは生きるべき人生を全うし、病の苦しみから解放されて、次の世界へと旅立つべき存在に選ばれたのだ。

ふわっと少女の体が宙に浮かんだ。

荒神に戦いを挑んでいた門番たちを従えて、おゆうは冥府の塔に戻っていった。

「おゆう・・・」

おゆうが塔の中に入ると、重い扉が軋んで閉まる音が響いた。

気がつくと、武流と荒神は、青い空の下に立っていた。

黄泉の国の扉は閉じられ、二人は現世に戻されたのだった。

つづく

6 神様だって叶えられない願いを抱えてる(2)

4 神様だって叶えられない願いを抱えてる

「武流の妹を返せ!!」

全身を血まみれにした荒神が天に向かって吼えた。

そして再び駆け出そうとしたので、武流は遮るように前に立った。

「もう、いい」

武流は言った。

「もうやめろ。」

死んだ人間は帰ってこない。

いくらお前でも、一度黄泉の門をくぐった者を現世に連れ戻すことはできないんだ」

「そんなことはない!!」

きつと睨んできた荒神の瞳は、赤色だった。

今までは武流たちと同じ、黒い瞳だったのに。

ここまでムキになっているのは初めて見たが、それでも武流は荒神の癩癩には慣れている。

いつものように、激昂している神を冷ややかに見つめた。

「確かにお前はおれたち人間に比べたら凄い力を持っているが、それでも、万能の神じゃない。

どうにもできないことってのが、世の中にはあるんだ。

いつも自分の思い通りになるとは限らない。

いい加減、それを分かれよ。

これ以上、癩癩おこして暴れても、寿命を縮めるだけだぞ」

武流はため息をついて、癩癩持ちの神様を見上げた。

だが、自分を見つめる荒神の顔に気付いて、武流は眉をひそめた。

荒神は、やにわに武流の肩を強い力で掴んで怒鳴った。

「お前はそれでいいのか!？」

妹が死んだままで!

離れ離れになつたままで・・・！！」

「痛い」

容赦のない力で肩を掴まれた武流は、痛みに顔をしかめた。

「武流！！」

返事を強要するように名を呼ばれて、武流は仕方なく口を開いた。

「そんなこと言っても仕方ないだろ。」

死んだ人間を甦らせることはできないんだから」

「お前は どうしてすぐ諦めてしまうんだ！

本当は嫌なくせに、どうして黙って我慢してしまっんだ！

オレはもうこれ以上、お前が辛そうにしているのを見るのはイヤだ

！！」

荒神は叫んだ。

「このままじゃ、お前の妹は死んだままだぞ！

黄泉の国から連れて帰らなきゃ！

たった一人の家族までいなくなってしまうなんて、そんなの武流が

可哀想だ。

そんな無情があつていいものか！！」

え？

武流は困惑した。

こいつは自分の思い通りにならないから、癩癩を起こしているのではなかったのか？

オオオオ・・・！！

荒神は、天に向かって慟哭した。

血のように赤い瞳が妖しく輝きを増し、全身の筋肉がめりめりと音を立てて隆起していく。

荒神の体に何か変化が起ころうとしているのだ。

武流は息をのんで、見つめた。

閃光が炸裂した。

武流が眩さに目を閉じ、次に開いたときには、そこには見慣れた大男の姿はなかった。

代わりにいたのは、天を突くほど巨大な生き物
頭には王冠のように尖った角をいただき、長いたてがみを風になび
かせ。

背には巨大な翼を持ち、鋭い爪のある四本の足で大地を踏みしめ、
光を放つ鱗に全身を覆われたその姿。

「荒神、お前は龍だったのか・・・」

雄雄しい龍の巨体を前にして、武流は目を細めた。

太陽の光を受け、その体は虹色に輝いている。

本来の姿に戻った荒神は、天に向かって一声嘶いた。

背中の翼を広げ飛び立とうとしたが、しかし、その巨体は大地に崩
れるように倒れこんだ。

「荒神！」

よく見れば、虹色に輝く鱗の間からは真っ赤な血が幾筋も流れてい
た。

先ほどの冥府の門番との戦いで受けた傷は、武流が思っていたより
もずっと深かったのだ。

立ち上がる力すら残っていないほどに。

「すまない、武流・・・」

大地に倒れ伏した龍は、自らの頭を持ち上げることもできず、顎を
地面に乗せたまま呻いた。

子供の頭ほどもある、龍の巨大な目玉は、ちょうど立っている武流
の視線と同じ高さにあった。

「確かにオレの力では、死んだ人間を甦らせることはできない・・・
オレはお前に何もしてやれない・・・」

ころん、と透明な水の塊が大地に転がり落ちた。

龍の赤い目玉から、大きな水の塊が次から次へと零れ落ちていく。
荒神は泣いているのだ。

武流は呆然としてその涙を見つめた。

「武流。」

お前がオレを嫌っているのは分かった。

それでもオレは、お前といられるだけで嬉しかった。

お前の笑った顔が見られるだけで、なんだか楽しい気持ちになる。だから、武流にも、オレと一緒にいるとき、楽しい気持ちになってほしかった。嬉しい気持ちになってほしかった。

そうなるようにしたかったけれど、オレにはどうしていいか、分からなかった・・・

いつもお前を傷つけてばかり。

大風を遮ることができたって、雨を呼ぶことができたって、それがどうだと言っただ。

お前のたった一つの願いさえ、叶えてやることもできないなんて。オレの力はムダなだけだ。

虚しいだけだ・・・！

龍はおんおんと声を上げて泣いた。

まるで子供のように、恥も外聞もなく、泣きじゃくっていた。

「荒神、お前・・・」

武流は龍に近付き、その鼻先に手を置いた。

太陽の光を反射して七色に輝いている鱗は硬くて、まるで鋼のようだったけれど、触れると龍の体温が感じられた。

自分から荒神の体に触れたのは、初めてだった。

今まで、荒神に近付こうなんて思ったことはなかったから。

でも今、武流は初めて自分から手を伸ばした。

「武流？」

荒神もそれに驚いたように、赤い目玉をきょろりと動かして武流を見つめてきた。

武流は大きな龍の鼻先にそっと身を寄せた。

「村の連中は、荒神のこと、神とあがめたてまつってはいるけれど、本当は訳の分からないバケモノだと軽蔑してる。

ただ、その力を利用したいだけ。

そのために、生贄を捧げ、膝まづく。

それは、おれにしたって同じこと。

神官だなんて大層な肩書きつけて頭を垂れては見せるけど、自分たちの生活を守るために利用しているだけ。

おれが荒神に壊されたところで、すぐに次の生贄を捧げる・・・使い捨ての駒だ。

村の連中にとつては、おれも荒神と同じように、ただ利用するためのもの。

分かってた。

だけど、それを自分で認めてしまったらあんまり惨めだったから・・・

だから、意地張ってた。

神だなんて言ってもしょせんは、ただのバケモノ。

そうやって軽蔑していれば　村の連中と同じようにしていれば、

おれは村の連中の仲間でいられる。

おれは、バケモノの仲間なんかじゃないと

荒神とは違うんだと

そう思つて、安心したかつたんだ。

バカだな。

おれ、自分のことしか考えてなかった。

すぐ隣にいるお前の気持ちなんて、分かるうともしなかった。

お前はいつだって、おれのこと、心配してくれていたのに。

おれがどんなに軽蔑しても、お前はおれを受け入れてくれたのに。

今までずっと、お前に体を傷つけられて、ひどい目に合わされてき

たと思つてたけれど・・・

おれはお前を傷つけてたんだな。

その心をずっと。

お前はいつだって、『仲良くなりた』って気持ちを、おれに伝えようとしてくれてたのに、おれはその心を踏みにじってた・・・」
龍の目玉からぼろりとこぼれた涙の粒を両手で受け止めて、武流は

言った。

「人だろぅが妖あやかしだろぅが、そんなことは関係ない。

お前は人ではないけれど、たった一人の家族に死なれたおれのために、本気で涙を流してくれた。

なのに、おれはお前のこと、分かつてもしなかった」

武流は龍の鼻先を抱きしめるように、両手を伸ばした。

その心に近付こうとでもするように。

「ありがとう、おゆうに会わせてくれて。

別れは悲しいけれど、でも、お前がいてくれなかったら、おゆうと言葉を交わすことさえできなかった。

最後におゆうと話せてよかった。

ありがとう」

龍はその目玉を驚いたように丸くしたが、やがて目を細めた。

「武流、初めてオレに、本気の『ありがとう』を言ってくれたな」

しよせんバケモノに人の心は分からない、なんて。

分かってなかったのは、自分の方。

荒神は、全てを知っていた。

それでいながら、ずっと武流のそばにいたのだ。

「オレ、武流を喜ばせることができたんだな」

子供のように無邪気に目を輝かせた荒神に、武流は頷く。

すると、荒神は、満面の笑みを浮かべた。

そんな荒神を見て、武流は苦笑した。

「お前、本当におれのこと好きなんだな」

「うん」

なんのてらいもなく、力強く頷かれると、武流の方が困ってしまふ。

武流は前々から気になっていたことを尋ねてみた。

「どうして、おれなんかがいいんだ？」

見てくれのいいのなら、他にいくらもいるだろぅに」

「オレは武流のそばにいたい。

初めて見たとき、そう思ったんだ」

荒神は、まっすぐに武流の目を見て答えた。

「他の子供たちはみんな大人に守られていたのに・・・

武流は、誰にも守ってもらえなくて、独りぼっちだったから」

確かに、自分たち妖には、ちっぽけな人間たちとは違って力がある。だから、独りで生きていける。

仲間と群れる必要などない。

そうだけど

はかなく消えてしまいそうな小さな命を前にして、その傍に寄り添いたいと

生まれて初めて思ったのだ。

「お前も寂しかったんだな」

「さびしい？」

「そういう気持ちを『寂しい』っていうのさ。

人間だって、十分な食料と安全な寝床さえあれば、独りでも生きていける。

でもそうしないのは、寂しいから。

人が集まれば、腹の立つこともたくさんあるし、たまにはケンカにもなるけど、それでも、つまらない馬鹿話に一緒に笑いあって、自分が必要とされると感じる時、ほわっと心があったかくなる。

だから、人は寄り添いあって暮らしてるんだ。

お前も、人とおんなじだ」

「そうだな。

オレは、神にはなりきれない。

それでも、お前のそばにいていいか？」

荒神の真剣な眼差しに、武流は頷いた。

「当たり前だろ。

今さらおれを一人にする気か？」

「武流、やっぱりオレがいないと寂しいんだ」

荒神が嬉しそうににんまりと笑う。

それはそれは幸せそうな顔を見て、武流はその鼻先をばかりと叩いた。

「痛っ！」

なにすんだよ、武流？」

荒神は、どうして叱られたのか分からない子犬のようにきよとんとしている。

そんな荒神に武流は答えた。

「なんとなくムカついた」

「なぜ？」

武流を喜ばせるのは、本当に難しいな……」

荒神は、鼻の頭に皺を寄せている。

「人間の心は複雑なんだよ。」

まだまだ勉強が必要だな！」

真剣に悩んでいる荒神の顔を見て、武流は心からの笑い声を上げた。

「むう……そうか。」

ならば、この姿ではダメだな」

再び閃光が龍の体を包みこんだ。

咄嗟に目をつぶった武流の耳元で、聞きなれた声が囁いた。

「やはりこの姿でないと。」

武流に触れることができない」

目を開けると、すぐ目の前には、見慣れた癩癩持ちの神様の顔があった。

人の姿に戻った荒神は、武流を抱きしめ、幸せそうに目を細めている。

鳥の羽でもつかむように、そつとそつと武流の腰に腕をまわして。

力の加減に迷ってるその腕の様子がおかしくて、武流の頬にふっと笑みが浮かんだ。

「・・・そのくらいなら、苦しくない」

武流がそう伝えてやると、荒神は得意げな笑顔を見せた。

「よし、このくらいだな。覚えたぞ！」

時には、武流を傷つける凶器にもなるけれど。

それでも、ずっと武流を守ろうとしてくれていた逞しいその腕に、

武流は身を委ねた。

End

#6 神様だって叶えられない願いを抱えてる(2) (後書き)

最後まで読んでくださって、ありがとうございました!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5501f/>

荒神（あらがみ）

2009年12月5日01時00分発行